

広報

# ちゃたん

CHATAN No.365



町花フィリソシンカ



町木センダン



## 伊礼原遺跡(いれいばるいせき)が語るもの（1）—土器—

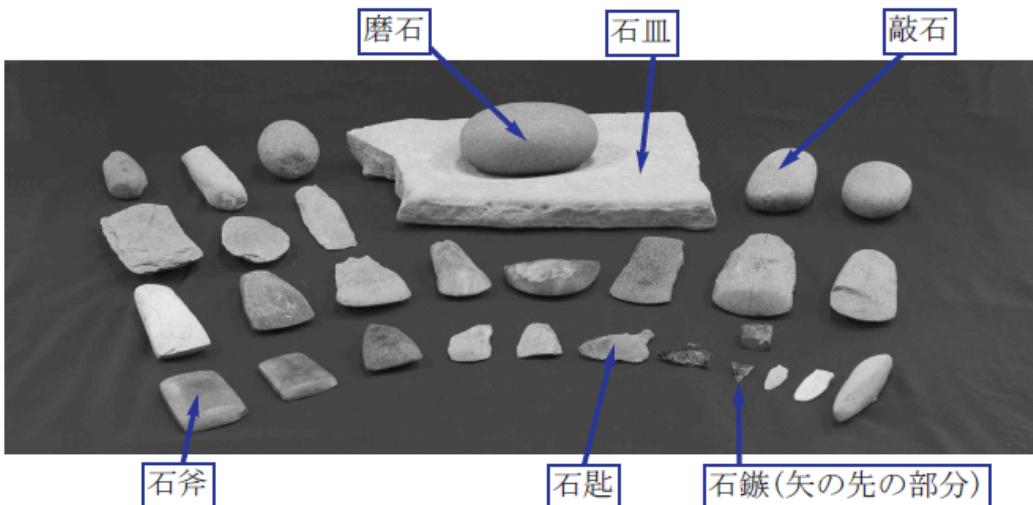
北谷町字桑江小字伊礼原にある伊礼原遺跡からは、約6,500年前から1,000年前までの年月を経たいろいろなかたちの土器が多数出土しました。写真は代表的なもの。中には、沖縄県内で初めての発見となる貴重な土器も見つかっています。

### Contents

■北谷町福祉課からのお知らせ	2	■地域フラッシュ	6~7
■教科書検定島見書きを求める県民大会	3	■BOOK POST	8
■e-TAXを利用すると所得税が5,000円控除されます	4	■津波被害を防ぐために	9
■健康だより	5	■お知らせ	10~11
		■第6回ちゃん健康・福祉まつり 裏表紙	

2007. 11

## 伊礼原遺跡（いれいばるいせき）が語るもの（2）－石器－



伊礼原遺跡からは土器の他にも生活に必要な道具が出土しています。石器はその一つで、地元の石だけでなく、九州の黒曜石（くろようせき）や本島北部のチャートなども使っています。昔はやりや弓で狩猟（しゅりょう）したり、石斧（せきふ）で木を切り倒したり、石皿（いしざら）を台にして敲石（たたきいし）や磨石（すりいし）で木の実を割ったりすったりしていたようです。写真の石匙（いしあじ）は沖縄で初めて発見されたもので、動物の皮を剥ぐのに使います。

この頃（約6,500年前）は打ち欠いて作った打製（だせい）石器が多いのですが、時代が新しくなると（約3,000年前）次第に刃を磨（みが）いたりした磨製（ませい）石器が増えてきます。

### 伊礼原遺跡について

伊礼原遺跡は、北谷町字伊平小字伊礼原にて発見された遺跡です。

今から約6,500年前の土器が発見されたほか、これまで沖縄県内で発見されたことのない木製の櫛（くし）や斧（おの）の柄（え）など、貴重な品々が数多く出土しました。伊礼原遺跡は、沖縄の歴史を語る上で重要な遺跡となっています。

出土品の一部は、那覇市新都心に新しくオープンした沖縄県立博物館の先史時代コーナーにて常設展示されています。

#### =おしらせ=

平成19年10月25日～12月28日までの間、ちゃたんニライセンター展示コーナーにて「わが町の土に埋もれた文化財—キャンプ桑江北側地区の発掘調査—」と題し、キャンプ桑江北側から出土した土器や石器、琉球王国時代の交易品等も展示しておりますので、是非ご覧になって下さい。

今後、北谷町の文化財を『広報ちゃん』で折々紹介していきます。

#### 6,500年前の世界の様子

- メソポタミア（現在のイラク）でシュメール文明が興り、楔形（くさびがた）文字が使われ始める。
- 中国の揚子江下流域では、獸骨（じゅうこつ）製の耕具で稻作を行う高度な農耕集落が形成される。
- エーゲ海のクレタ文明では、上下水道や水洗便所が整備される。
- ギリシアでは磨製石器や鋤（すき）を使う農耕民の集落が築かれる。
- ブルガリアでは銅器が使われ始め、墳墓（ふんぼ）群が築かれる。
- メキシコ南部でトウモロコシの栽培が始まる。
- 日本では縄文時代の早期にあたり、青森県にある三内丸山遺跡では定住生活が始まる。
- 鹿児島県佐多岬の南西にあった鬼界カルデラが大噴火を起こし、西日本各地に火山灰を降らす。



## 伊礼原遺跡（いれいばるいせき）が語るもの(3)

### \*伊礼原遺跡とは？

縄文時代（じょうもんじだい）から現代（げんだい）に至るまで約7,000年という長い間の、生活の痕跡（こんせき）や自然環境（しぜんかんきょう）が確認できる県内でも国内でも貴重（きちょう）な遺跡（いせき）です。ウーチヌカーという湧き水（わきみず）をよりどころにした人々がいました。もしかしたら皆さんのご先祖様かもしれません。

### \*場所はどこ？

国道58号から北谷町役場へと曲がる道路に入ると左手がキャンプ桑江北側といわれる地域です。この道路と国体道路の間に伊礼原遺跡があります。

### \*何が出たの？

約7,000年という長い間ずっと水に浸かっていたため、竹で編（あ）んだザルや石斧（せきふ）の柄（え）なども見つかりました。

このザルは沖縄でもっとも古い貴重なものです。保存処理（ほぞんしょり）されているため、ニライセンターで見ることができます。他にも、広報10・11月号で紹介した土器（どき）や石器（せっき）なども出ています。



石器の使用復元図



### \*遺跡・遺構・遺物って何？

遺跡は、昔の人が活動した痕跡（こんせき）のことです。

遺構は、昔の人が建物を建てた跡などの動かせないものです。

遺物は、昔の人が残した土器や石器などの動かせるものです。



ニライセンター入り口にザルが展示されています



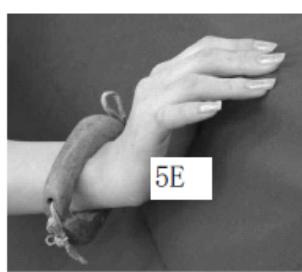
伊礼原遺跡からは遺構も遺物もたくさん発見されています。これからもいろいろ紹介していきたいと思います。

## 伊礼原遺跡が語るもの（4）＝骨でつくられた古代人のアクセサリー＝

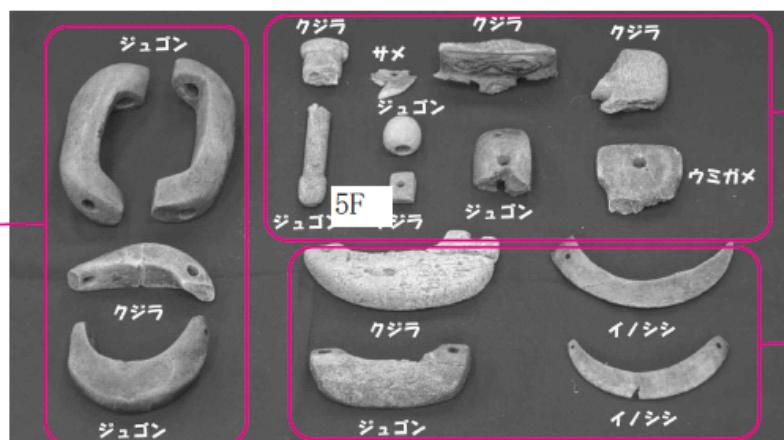
北谷町教育委員会 社会教育課 文化係 Tel 936-1234(内341~348)

伊礼原遺跡からはイノシシの牙やジュゴンの骨を削って穴をあけ、綺麗に磨いて作ったプレスレットやペンダント、クジラの骨に細かい模様を彫って簪（かんざし）にしたもののが色々と発見されました。まさに古代人のアクセサリーです。

写真は伊礼原遺跡から出土した古代人の巧みな技が結集された骨製品で、今の我々にひけをとりません。これらの豊かな文化を後世へと伝えしていく貴重な宝物なのです。

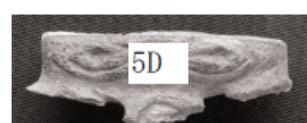


プレスレット



簪（かんざし）

ネックレス



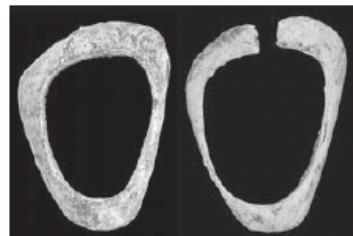
▲クジラの骨でつくられた簪（かんざし）

## 伊礼原遺跡が語るもの（5）＝弥生人が好んだ南海産の腕輪＝

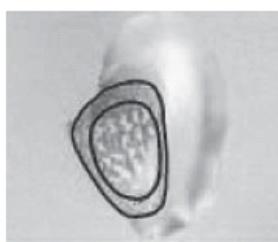
伊礼原遺跡では、イモガイを加工したビーズ（貝玉）やゴボウラ貝をくりぬいて作った腕輪が発見されました。（写真1,2）

ゴボウラやイモガイは沖縄近海に生息する貝で、弥生時代には北部九州でもゴボウラの腕輪を何個も装着した人骨が発見されています。（写真3）

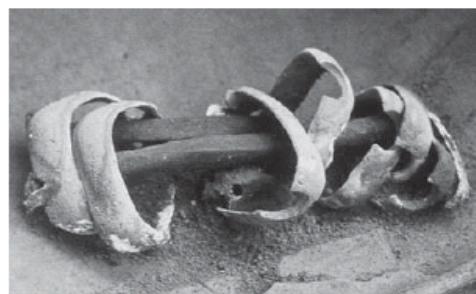
ゴボウラ貝輪は、当時の権力者の間では人気があったと思われ、それを求めて弥生人は、沖縄に渡ってきたようです。沖縄の遺跡では、これに備えて素材の貝をストックした跡が多く見つかっており、伊礼原遺跡でもゴボウラ・イモガイの貝集積が発見されています。（写真4）



▲ ゴボウラ製腕輪(写真1)



▲ 使用部位(写真2)



▲ 福岡県諸岡遺跡出土(写真3)

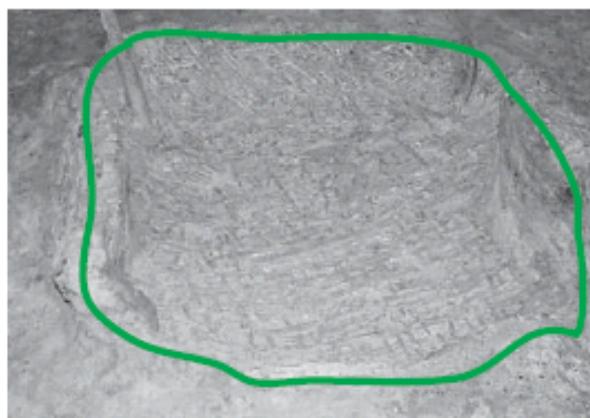


▲ 伊礼原A遺跡で出土したコボウラ  
やイモガイの貝集積(写真4)

## 伊礼原遺跡が語るもの（6） ＝奇跡的に残った笊(バーキ)＝

ニライセンターの正面玄関に展示されている笊（バーキ）（左下写真）は伊礼原遺跡から発見されました。笊は発見されるまで水に浸かっていたために腐らずに残っていました。県内では、宜野座村の前原遺跡と本町の伊礼原遺跡の2カ所で出土しています。

笊は今から約5000年前の縄文時代前期のもので、リュウキュウチク（本島で普通に見られる竹）で編まれたものです。川の中に沈めて四隅を杭で固定してオキナワウラジロガシなどの木の実を保存したり、アクを抜くために使用していたものと考えられています。



▲ 保存処理された笊(太線で囲んだ部分)



▲ 算の使用予想図

## 伊礼原遺跡が語るもの(7) =縄文人が食べたどんぐり=

先月号で紹介した「笊(ざる)」の中からまとまった状態で出土したオキナワウラジロガシ果実は、約5000年前の縄文時代前期のいわゆる「どんぐり」です。

この果実は、タンニンの含有率が高く渋みがあるためにアク抜きをして食料にしたと考えられています。大型のどんぐりと言われるこの果実の他にも、たくさんの果実が笊〔方言名：バーキ〕の周辺からまとまって出土しました。

これらの種実や花粉などの分析などから照葉樹林に分類されるシイ属やブナ科の果実が大量に出土していることがあきらかとなり、遺跡の周辺には、これらの樹が繁る常緑広葉樹林が成立した自然環境があったと考えられる成果が得られました。



◀ 竂(ざる)内から出土した  
オキナワウラジロガシ果実



受粉から約18ヶ月目のドングリ（成熟が近い）  
10月 沖縄県

## 伊礼原遺跡が語るもの(8) =小川の川底より出土した木製櫛(くし)=

写真は、伊礼原遺跡より出土した堅櫛（たてぐし）です。

今から約2500年前の縄文時代の晩期に作られた長さ8cm、最大幅4.2cm、最大厚0.8cmの櫛で南島において初の出土品です。

素材は、沖縄に自生する樹木ヤエヤマコクタン（俗に黒木）で、一枚板に先端のとがった利器で両面より幾度も削って精巧に歯を作り出す刻歯式（こくしき）技法で作られたものです。

櫛（くし）には髪をくしけずる機能と、ヘアピンのように髪をとめて飾るものがあり、縦に長い堅櫛と横に長い横櫛があります。



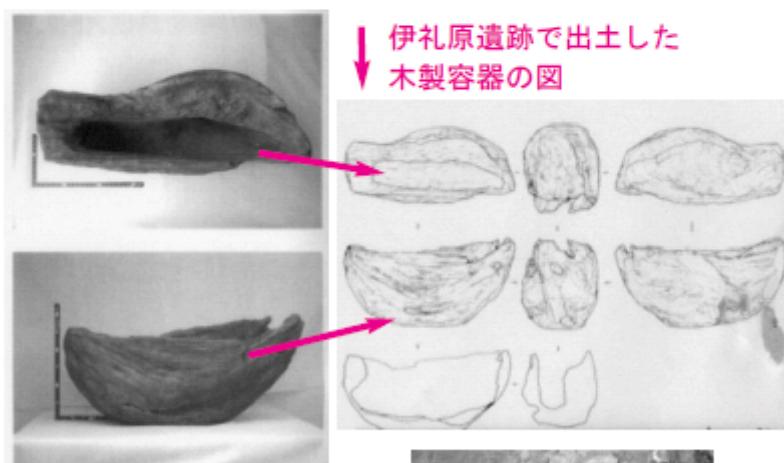
## 伊礼原遺跡が語るもの(9) =石斧や木片と共に出土した木製容器=

写真の木製容器は、今から約4500年前の縄文時代中期のもので南島でははじめて伊礼原遺跡で発見されました。

容器の大きさは、縦27cm、横63cm、高さ32cmのやや長方形で側面は船の形をしており、内側はくり抜かれて底の部分は安定するように削られています。

容器の材質であるショウナンボクの現生種は、台湾や中国南部に生育しているようです。

縄文人は、この木製容器を利用して木の実を集めたり、つぶしたりして使っていたのでしょうか？（あなたならどのように使いますか。）



右図は伊礼原遺跡で出土したときの写真

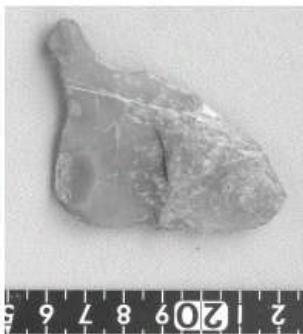
## 伊礼原遺跡が語るもの(10) =沖縄で初めて出土した打製石器石匙(いしさじ)=

縄文前期(約5500年前～約5000年前)の層から狩りで捕つてきいたイノシシの皮を剥いだり、肉を切ったりする時に使われる石匙(いしさじ)(右図)が沖縄で初めて発見されました。

石匙(いしさじ)には、縦型、横型の2タイプがあり、伊礼原遺跡から出土した石匙は横型です。(右写真)

携帯万能ナイフと考えられ、つまみのようになつているところに紐を巻き付けて首にかけたり、腰にまいたりして使用していました。

▶伊礼原遺跡で発見された縦5.5cm、横6cm、重量30gの石匙(いしさじ)(写真)



イラスト：稲嶺えりな

## 伊礼原遺跡展

広報「ちやたん」に掲載している「伊礼原遺跡が語るもの」の遺物の展示会を下記の日程で開催いたします。皆様、ぜひご観覧ください。

記

開催日時 平成20年8月27日(水)～9月1日(月)

開催場所 北谷町役場レセプションホール

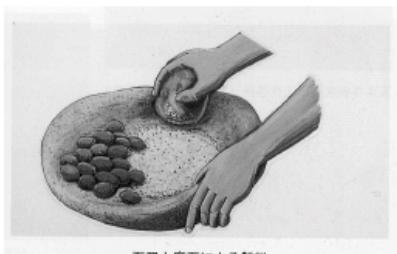
お問い合わせ 北谷町教育委員会 社会教育課 TEL 936-3159



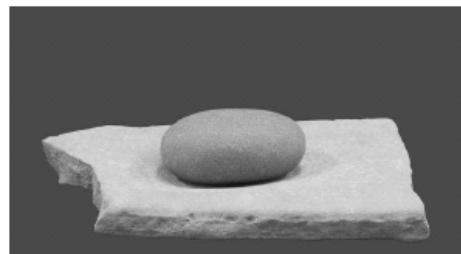
## 伊礼原遺跡が語るもの(11) =暮らしをさえた道具たち=

伊礼原遺跡から出土した石皿と磨石を紹介します。石皿は中央に浅く窪みができるで、すり潰すための磨石と対になり、ドングリや木の実の製粉や顔料の粉碎などの用途が考えられます。素材は主に安山岩や砂岩などの硬い礫材を使用しています。

縄文人の飽くなき食文化の伝統、縄文人の知恵を雄弁に物語つてゐる道具のひとつです。



石皿と磨石による製粉  
石皿の大きさは横36.8cm 縦23cm  
厚さ4.3cm 重さ5000g



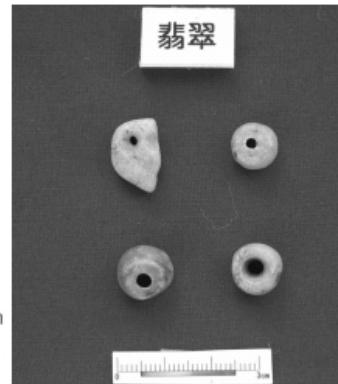
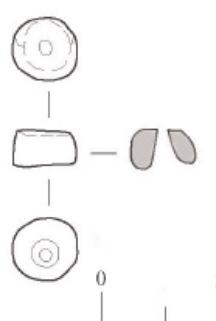
磨石の大きさは横8.6cm 縦14.4cm 厚さ6.8cm  
重さ1300g

## 伊礼原遺跡が語るもの(12) =海を渡ってきた宝石“ヒスイ”=

今回は伊礼原遺跡から出土したヒスイを紹介します。これは今から約2500年前のもので、大きさはいずれも1cm前後です。

ヒスイは日本で唯一、新潟県糸魚川市から産出されますが、約1600Kmも離れた糸魚川産のヒスイがどうやって伊礼原遺跡にやってきたのか考えるとロマンを感じますね。

またその“ヒスイ玉”的加工法もおもしろく、図の断面をみて頂ければわかるように通常孔を開けるときは両方面から孔を開けていきますが、出土した玉は一方方向から孔を開けています。これは遠く青森県の三内丸山遺跡から出土しているヒスイ玉と同じ技法というのですからますます奥深さを感じますね！



伊礼原遺跡で発見されたヒスイ玉(写真)及び  
そのうちの1つの玉の実寸図(上図)

## 伊礼原遺跡展を開催しました。

8月27日(水)から9月1日(月)まで、北谷町役場1階レセプションホールにて行われた伊礼原遺跡展に6日間で約600名の方がご来場しました。

会場では、伊礼原遺跡で出土した当時の様々な生活用品をはじめ、数多くの展示品があり、来場した方からは、「沖縄でも縄文式土器が出るのは知らなかった。」、「北谷では昔から海を通して、世界との繋がりはあったことがわかった。」といった感想を述べ、伊礼原遺跡について理解を深めていました。



## 伊礼原遺跡が語るもの(13) =昔ならではのエコ=

伊礼原遺跡は、山や海の幸に恵まれた地域で、その中でも、イノシシの骨がわかっているだけでも約350個体が見つかっています。

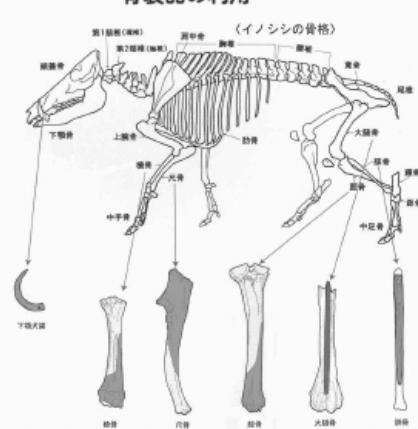
中には、焼けた骨もある事から、食べていた事がわかりました。

また、イノシシは食べるだけでなく残った骨の中から程良い大きさ、硬さの骨（手足の骨）を、削り、尖らして“けもの”的皮などを縫う針などが見つかっています。その中には、器用に「孔」が開けられているものもあり、漁で使用する為のヤス（突具）、用途は不明なのですが、鉤（カギ）などが生活のなかで、さまざまな道具として活用されていたようです。

骨には、約5mmほどの孔や切り込みがあったりと、器械もない頃にどのように作ったのか昔の人の知恵と工夫に驚かせられます。



### 骨製品の利用



▲右図はイノシシの骨格で、黒い部分が左写真のように加工されて使用されていました。

## 伊礼原遺跡が語るもの(14) =おしゃれ度抜群な伊礼原遺跡の人々=

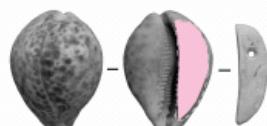
伊礼原遺跡の調査では大量の貝が出土し、食料としていたことがわかりました。

その種類は、300種以上と豊富です。私たちは今も昔も貝を採取し海の幸としていたことに変わりはないようです。

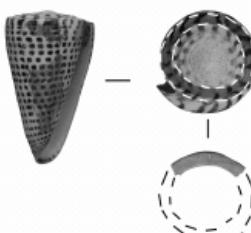
貝塚時代の人々は、採取して食する以外に貝製品をつくることなどに利用していました。その中から装飾品も多く出土しており、貝の形や特徴をいかしながら、いろんな部分を使って製作しました。

その用途としては、腕輪、ビーズのネックレス、ペンダントなどのアクセサリーがあります。

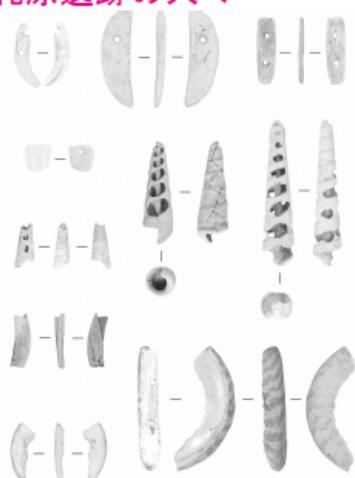
模様の違うきれいな貝殻でつくった装飾品を身につけていたなんて当時の人々もおしゃれを楽しんでいたんですね。



▲ タカラガイ(桃色部分使用)



▲ アンボンクロザメ



▲ 伊礼原遺跡で出土した貝製品

## 伊礼原遺跡(いれいばるいせき)が語るもの(15)=古代人の造形美=

伊礼原遺跡からは細かい文様を施した土器が多数出土しています。

右の写真は約3500年前の面縄東洞式土器で、ルーツは奄美大島と言われています。高さ16.5cm、直径16cmと深鉢の中でも小振りなのですが、口縁部には手の込んだ、縄をねじったような美しい文様が張り巡らされています。

面縄東洞式土器の文様はある一定のパターンで、緻密に計算されて作られているようです。その頃の流行なのでしょうか、竹などの筒状になった木を縦に割り、粘土に押したり引いたりする技法で、籠を編んだようなデザインに仕上げられたものが多く出土しています。

伊礼原に住む古代人の造形美が感じとれる出土品です。



上写真 面縄洞式土器



右上写真 土器の口縁部



右写真 面縄東洞式の破片

(口縁部分)

## 伊礼原遺跡が語るもの（16） =伊礼原遺跡から出土した曾畠式土器=

北谷町教育委員会 社会教育課 文化係 TEL 936-1234(内341~348)

(籠をまねた文様?)

伊礼原遺跡からは約6800年前の爪形文土器～約800年前のグスク土器まで出土しています。その中でも縄文相当期の土器は様々な文様が施されています。

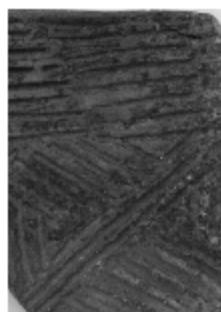
写真は高さ27.7cm、口径27.8cmの大降りの土器で、約5500年前の曾畠式土器です。熊本県宇土曾畠貝塚出土の土器を標式としています。

文様は竹串のようなもので幅広の沈線文を土器全体に施しています。口縁部と胴部の中程は長さ5cm程の沈線文を横に、その間は縦や斜めに施します。底部は丸く、ちょうど籠を編むように十字に施しています。土器が作られるようになるまで、籠を利用していたとも言われ、曾畠式土器の文様はそのような起源を持つかもしれません。

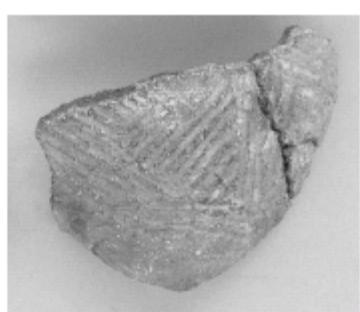
また、九州本土で出土する曾畠式土器は長崎県で採れる滑石の粉が混ざっていますが、伊礼原遺跡の曾畠式土器は白色粒（貝やサンゴ）や砂が混ざっています。地元、北谷町で作られたと思われます。しかし、1点だけですが、滑石の混入した土器が出土しました。当時、九州から土器を持ち込んだものと思われます。約5500年前のことです。



▲曾畠式土器



▲口縁の文様



▲底部の文様

## 伊礼原遺跡が語るもの(17)=古代人の造形美=

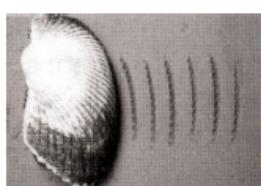
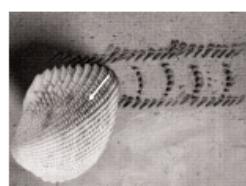


北谷町教育委員会 社会教育課 文化係  
TEL 936-1234(内341~348)

伊礼原遺跡は、縄文時代の色々な模様の土器が出土していますが、右下の写真はカワラガイやサルボウの貝殻を押し当てた文様が施されています。

伊礼原の人々は、貝を食料としただけでなく、土器等に文様を施す道具（施文具）として再利用したようです。右側の土器は、口径約27cm、高さ約55cmと、沖縄最大の土器で縄文前期（約5000年前）の『室川下層式土器』です。今から35年前、沖縄市の室川貝塚の最下層から発見された事から、その名がついています。

この土器は、現在沖縄県立博物館に展示中で、4月からは「全国発掘速報展」に沖縄の代表遺物として全国を巡回する予定です。



貝殻を押し当て  
た再現文様



(約55センチ)

《沖縄最大の土器》

▲伊礼原遺跡から出土した室川下層式土器

## 伊礼原遺跡が語るもの(18)

### =古代人の造形美=

北谷町教育委員会 社会教育課  
文化係 TEL 936-1234(内線342)

今月は、伊礼原遺跡から発見された「爪形文土器 (つめがたもんどき)」について紹介します。爪形文土器は、現在沖縄県で最も古い有文(ゆうもん)土器で、今から約6500年前に奄美大島から沖縄本島の地域にかけて流行しました。爪形文土器は、大きく2つの特徴があります。

1つは、土器の厚みが3mm~6mmとかなり薄くなります。もう1つの特徴は、その名が示すように、爪による文様が土器の表面に見られる事です。文様の中でも、①指の腹で押しつける事で爪の形がはっきりしないものと、②指先で押しつける事で爪の形がくっきり残るものがあり、①が古く②がやや新しくなる事が分かっています。また、文様の間が無文になるもの等、バリエーションも種々あります。古代の人々は、どのようにしてこの文様を産み出したのでしょうか。土器を作るときに指のあとが付いた、煮炊きの際に熱効率を上げた、など諸説あります。この文様を見て、現代に生きる私たちは何を思い浮かべることができるでしょうか。古代へ馳せる想いは尽きませんね。



左=通称 指頭押圧文 (しどうおうあつもん)

中=通称 爪形文 (つめがたもん)

右=爪形文土器全体の様子 (写真部分は伊礼原  
遺跡より出土したもので、点線部分は復元  
想定ライン、口径16,2cm)



墨による墨拓から、①指の腹でつけた文様(左図)と、②指先でつけた文様形状(中図)の違いが確認出来ます。沖縄県から発見される最古の土器は、約7000~6500年前の無文土器で、爪形文土器よりも少し古くなります。

## 伊礼原遺跡が語るもの(19)

### =粘土紐と線で飾った鞠形の土器=

北谷町教育委員会 社会教育課 文化係  
TEL 936-1234(内線342)

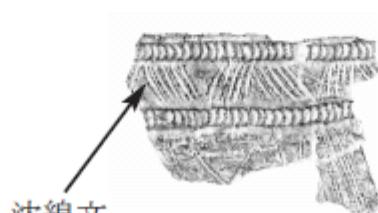
今回は面縄前庭式土器を紹介します。この土器は約4500年前の縄文時代中期に作られたもので、鹿児島県徳之島伊仙町の面縄第4貝塚(前庭)で初めて出土したので「面縄前庭式土器」と名付けられました。

形は全体的に鞠(まり)みたいで、丸い底になるのが特徴で、壺形と深鉢形の2種類があります。文様は口縁部分に細い粘土紐を2本張り付けその上に三日月風の模様(細い竹を2つに割ったもので模様を付けた)が施され、口縁部分の粘土紐と粘土紐の間と胴部から底部近くまで縦や斜めに5・6本の沈線文が描かれています。

奄美で発見された土器が沖縄の遺跡で発見されたのは、この時代にどんなつながりがあったのでしょうか?

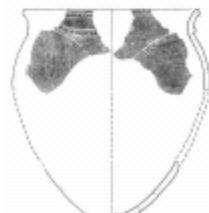


▲面縄前庭式土器



沈線文

▲面縄前庭式土器 拓本



▲復元図

## 伊礼原遺跡が語るもの(20)

### ＝口縁部が膨らみこぶのある土器＝

北谷町教育委員会 社会教育課 文化係  
TEL 936-1234 (内342)

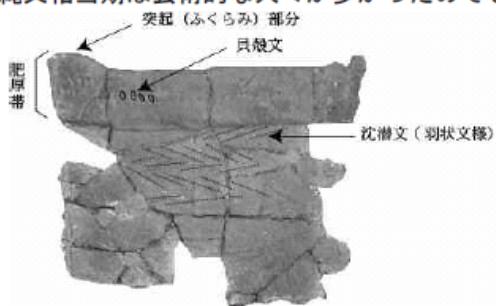
今回は仲泊式土器を紹介します。

仲泊式土器は、縄文時代後期（約3500年前）の土器で恩納村仲泊貝塚から初めて出土したことから「仲泊式土器」と名付けられました。伊礼原遺跡から（仲泊式土器）総数913点が出土し、器種は壺形と深鉢形の2種類あります。

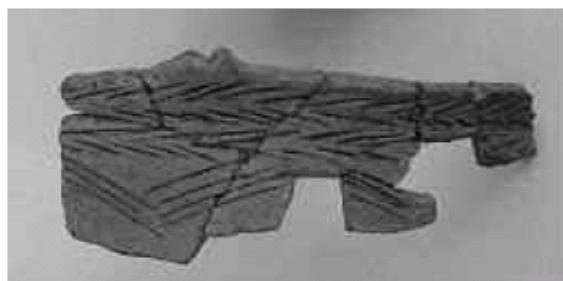
この土器の特徴は、写真1のように口縁部（肥厚帯）に突起を3～5個配するもので、幅22～32mm肥厚します。肥厚部に貝殻文があり、胴部は沈線文（ちんせんもん）になり、細い竹べらで羽状（うじょう）文様（もんよう）が丁寧に施されています。仲泊A式土器と呼ばれています。

写真2は口縁（肥厚帯）部分から胴部にかけて沈線文がくっきりと丁寧に施されています。仲泊B式土器と呼ばれています。本土の縄文土器は装飾性が高く、芸術的なものが多く見られ、伊礼原遺跡の縄文相当期の土器も本土に負けないくらいすばらしい文様が施されていました。

縄文相当期は芸術的な人々が多かったのでしょうか？



▲写真1 仲泊A式土器(口径 : 22.8cm)



▲写真2 仲泊B式土器 口径 : 28cm

#### ーお知らせー

文化庁主催の『発掘された日本列島 2009 展』（東京都、大阪府、高知県、栃木県、愛知県を巡回）において、伊礼原遺跡から出土した土器、石器、骨製品等が展示されることになりました。